

2008.01.30

みねワールドの真実 ~ 「学び合い」への道、 n 次元連立方程式の解を求めて~

有限会社 カヤ 平井良信

はじめに

担任教師嶺村芳の目標は、やさしい子どもになって欲しい、また、クラスのどんな子どもも、私は認められているのだとつながりを感じられ、居場所を感じられる安心できるクラスであること、同じクラスの仲間と心許し合い関わり合えるクラスであること、やさしさを生かし助け合えるクラスであること、取り組みに対して自分の持てる力全力でぶつかり力を出し切ることのできるクラスであることである。

その目標を実現するために、まるで n 次元連立方程式を解くが如く精力的に行動する。いろんなところに出掛け情報を集め、書籍を読みあさり、自分なりの研究会を主催し、それらをベースに種々の実践をこなして、ひとつずつの解を潰してきた彼は、今回の「あなたへ」シリーズを使った授業に何を期待し何を掴んだのか。少なくともひとつの解は求めたのであろうか。それを私なりに検証してみたい。

みねワールドとは

担任教師は独特の雰囲気を持ち子どもたちみんなから好かれていて、いわゆる「みねワールド」を形成している。それは彼自身の人格とともに、先に掲げた「やさしい子ども」になって欲しいと願いつつ居場所を感じられる安心できるクラスであることを願うという目標も要因であろう。それはひとり一人にクラスでの存在感を持てることを保障することに他ならない。そのような彼のあたたかい目線がクラス全体を覆っていることがみねワールドの基本である。

そして彼のこだわりの学習形態が「自分考え、グループ考え、みんな考え、ふりかえり」である。まず自分自身で考え次に5~6人のグループで話し合い、最後に全体での発表により、意見交流をし振り返ることによって、学びをより深めていくという方法で、これを学び合いの手段としている。

しかし、彼は目標に向かって進みつつも苦悩の日々を過ごしていた。そしてこの「あなたへ」シリーズを使う授業に出会ったのである。チャンスだと思ったに違いない。なぜなら他の教科のように確たる正解があるわけでも無く、子どもたちそれぞれが考える事の中に価値があり、また話し合うことでお互いを知り、学び合えるのではないか。そして、子どもたちの間に新しいつながりが生じるのではないかという期待を持っていた。

学び合いへ、気づきのなかで

日々の忙しさにかまけ準備不足の状況で授業は始まった。

「あなたへ」シリーズのこの絵本は短く洗練された言葉と表現力豊かな力強いイラストで構成され、子どもやおとなに関わらず自由な想像力を喚起させるパワーを秘めている。そのシリーズ15冊の中から彼は「じぶん」「たいせつなあなた」「うれしい」を選び、それぞれ2回ず

つ、最後に「絵本作り」1回の合計7回の授業構成とした。もちろん「自分考え、グループ考え、みんな考え、ふりかえり」の手法を使った。

そして、変化のきざしは2回目の授業から始まるのである。

『絵本「あなたへ」を通じての学び 2006.8.9』より

ルールへのしぼりつけ（第2回授業）

自分が考えているより、子ども達は絵本から感じることもある（第3回授業）

（教材理解不足？ 児童理解不足？）

ものすごくもりあがる（第4回授業）

没頭、次から次へと作品が（第5回授業）

子ども達の工夫

彼自身の振り返りにもあるように、子どもたちの変容に驚かされたのである。絵本に刺激されたのか沸き立つ様な子どもたちの反応に唖然としたのであろう。この他にも班ごとみんなが隣の班へ聞きに行く（第4回授業）という大胆な行動に出たグループもあった。普段は班で活動する場合はその班内で話し合う。教師の指導も班内で話し合いなさいという指導をしている。おざなりな活動としては班内にそれぞれの役割が自然に生じて、リーダー的な子どもがひっぱり残りの子どもはじっと聞いているということが一般的である。しかし、この5人の班は全員が隣の班に話を聞きに行ったのである。リーダーだけが動いたのではなく、5人全員が知りたいという欲求に素直に動いたことの証明であろう。このような子どもたちの行動を起こさせた原動力ははっきりしないが、絵本に触れ、心が動き更にみんなのことも知りたいと願った結果であろう。すばらしい行動であると言わざるを得ない。また、教師の方法論から逸脱した行動であることに疑いは無い。

彼はこのような子どもたちの活発な言動や得意な行動から教師が関わりすぎていたのではないかという解を導き出したのである。いままでは、自分の想いが子どもたちを縛っていた。つまり教師の思いや願いが子どもたちに影響を与え、自分の思いや気持ちを抑えて、ひたすらに言われたことを忠実にこなしていて、教師は事前に意図していたねらいからはずれない反応を示す子ども達を期待していたのではないか。この教師の期待が子どもたちに自由な発想や行動を阻害していたのではないか。子どもたちには子どもたちの想いがあり、教師が関わらずとも、子どもたちは教師の予想を遙かに超える結果を出すものなのではないかと。つまりその先には子どもは有能である、子どもを信じれば良いという概念が横たわっている。

いままで彼はいつも子どもたちとの繋がりを求めていた。信頼感を持ったつながり。そして子どもたち同士にもそれを求めたのであろう。強制したと言っても過言ではない。しかし、子どもたちには彼らなりの繋がりがあり、つながりたいときに繋がりたい相手と繋がりを持つ。それを強制することは出来ないのである。子どもたちによかれと願い実践して来た彼と子どもたちとの間には大きな不幸な溝が存在していた。

今回子どもたちはそのような善意の縛りをも解きほどこき、3冊の絵本から何かを感じて解き放たれた様に自由に活発に表現し行動した。また、教師自身もこの教材から感じるものがあっ

たのではないだろうか。その後「自分考え、グループ考え、みんな考え、ふりかえり」は止めたそうである。

最後の解を求めて

教師が関わりすぎているのではないかと、子どもは有能で、信じればよいという解を見いだした彼は、昨年2007年4月に勤務校が変わった。そして違った環境の中で、また新たな「学び合い」の実践者や概念との出会いを通じて、更なるみねワールドとしての「学び合い」に結びつけている。

(n-1)次元へとひとつずつ解を求めていき、最後の解にたどり着くそこには、新たな“みねワールド”の真実がある。

参考文献

- ・西川純 (2006) 学び合う教室 東洋館出版
- ・西川純 (2005) 「静かに！」を言わない授業 東洋館出版
- ・西川純 (2008) 「学び合い」の手引き書
<http://www004.upp.so-net.ne.jp/iamjun/tebiki/tebiki.pdf>
- ・岸見一郎 (2007) アドラー心理学入門 KKベストセラーズ
- ・二文字理明・深谷馨・平井良信・濱内麻里・張 雅・近藤久史 (2007) スウェーデンの教材「あなたへ」を活用した根元的価値形成の授業研究() - 授業実践の基本構想と事例研究(その1)の概要 -
- ・二文字理明・平井良信・東泰弘・藤原翔子・松田義康・松山倫子 (2008) スウェーデンの教材「あなたへ」を活用した根元的価値形成の授業研究() 2つの光の中に浮かび上がる授業研究(その1) - 参与観察者から見た教師と児童の変容 -
- ・嶺村芳(2008) 「あなたへ」を活用した「こころ」の授業 ~基本的授業観と授業実践~ (非公開資料)
- ・嶺村芳 (2006.8.9) 絵本「あなたへ」を通じての学び (非公開資料)
- ・嶺村芳 (2007.12.6) あの時06、そして今07 (非公開資料)
- ・授業観察記 (2006.6.19~7.13)(非公開資料)
- ・授業記録 DVD (2006.6.19~7.13)(非公開資料)